

Homage

Professor Tamotsu Fujinaga (1926–2016)

去る2016年1月21日、教育研究所元所員であられた
藤永 保元教授（89歳）が逝去されました。

研究所といたしまして、ここに謹んで哀悼の意を表します。

Professor Tamotsu Fujinaga, former member of IERS,
former Professor of Psychology, passed away on January 21, 2016.

IERS expresses its condolences.

藤永先生の思い出

In Remembrance Prof. Fujinaga

栗山 容子 KURIYAMA, Yoko

● 国際基督教大学名誉教授
Emeritus Professor of International Christian University

大井 直子 OOI, Naoko

● 国際基督教大学教育研究所 ■
Institute for Educational Research and Service, International Christian University

7月初旬の細い雨が降る日、藤永保先生を偲ぶ会が茗荷谷の茗溪会館であり、教鞭をとられた大学の関係者や、共同研究者、教え子たち、出版関係者など多勢が集まりました。その中にICUの卒業生も何人か出席していて、藤永先生と当時の院生たちとの長い交流が偲ばれました。

藤永先生がICUに着任されたのは1992年4月、お茶の水女子大学を定年で退職された年で、星野命先生ご退任の後、特任教授として5年間のご奉職でした。教授会はじめ諸会議は職責上出席の義務がなかったため、教員との交流は限られましたから、その分、院生との緊密な交わりを楽しめたのではないかと思います。女子大で長く教鞭をとられていたためか、男子学生を交えた藤永先生を囲む飲み会をととても楽しみにされていたと聞いていました。大井先生がその時の様子をお書きくださっています。

私と藤永先生との出会いもまた、学生時代に遡ります。初めての心理学の授業が先生の一般教養課目『心理学入門』でした。専門課程になってからは人格心理学の授業で権威主義の人格論を取り上げた授業が印象に残っています。専門に入る大学3年の時にお茶大に移られることになり、有志学生がアルコール抜きの残念会（歓送会）をしたことを思い出します。

当時、キャンパスにあった小さい池で先生が釣

り糸を垂れていたという噂が広がっていました。まだ30代後半の頃のことですが、何があっても悠々、泰然として大局的な観点からゆっくり繰り出されることばに、若い学生たちは研究・教育の知的な雰囲気を感じたものでした。ICUに着任された藤永先生に何十年ぶりかでお会いした時、肩までの白い御髪に歳月を思いましたが、学生時代の印象そのままのお人柄で、深い思索のありようが偲ばれて感慨深かったことを記憶しています。

先生の多くの学術的な業績について、私が直接語れることは多くありません。星野先生が藤永先生をICUに招聘されたのは、人格理論や人間発達に関わる領域での共通のご関心があったことによると思います。一方、星野先生が人格、社会、臨床、教育など、専門に閉じこもらない『学際的な仕事』をされたのに対して、藤永先生は人間発達や教育に関わる専門的な知見を専門分野に狭く閉じ込めず、『啓蒙的な仕事』をなさってこられたように思います。先生の遺された多くの著書からも、発達・教育に関わるメッセージを一般に向けて発信し続けてこられたことがわかります。私自身、そうした数多くの著作を通して藤永先生に啓発されてきたように思います。次の教育環境と人間発達に関する長期研究もその一つです。

1972年、極度の貧困環境（お寺の回廊に作られた小屋で隔離されていた）で育てられた5歳と

6歳（1歳ないし1歳半の発達年齢）の姉弟が救出されました。先生は14年という長期にわたってその姉弟の発達・教育援助に関わられて、その記録が1987年『人間発達と初期環境：初期環境の貧困に基づく発達遅滞児の長期追跡研究』として著されました。欧米では研究があったものの、環境剥奪による発達遅滞児の長期観察調査は本邦初の試みでした。まだ発達心理学という分野も確立されていない頃のこと、欧米の研究では説明できない成果が明らかにされ、また詳細なデータは示唆に富んでいて、研究者や教育関係者に強いインパクトを与えました。

偲ぶ会で最後の御著書『藤永保の「子育て・子育て考—子育て困難な時代への警鐘」』をいただきました。日本の文化に根ざした心理学が先生の持論であり、特徴でもあったことを考えると、ここに先生の研究の集大成が遺されたのだと思っています。

学生時代から欠かさず年賀状のやりとりが続いていましたが、今年は賀状がありませんでした。そして訃報が届きました。藤永先生に深い感謝と追悼の意を捧げます。

（栗山容子）

昨年末、藤永先生の入院先にお見舞いに伺うと、先生はお話ができない状態でした。直ぐに「藤永先生を囲む会」メンバーに先生の状態を伝えると、卒業生が関西など地方からも次々にお見舞いに訪れました。少し状態が好転されて病室でシャンパンを飲んだり、次回の飲み会の幹事を指名されたりという楽しい報告もメンバーから届いていました。お亡くなりになる6日前、とろみ付きのシャンパンで乾杯をし、ありがとうと強い握手をして下さいました。

藤永先生がICUで教鞭をとられたのは5年間という短い期間でした。私は原一雄先生の定年ご退職後の2年間だけ、藤永先生から博士論文のご指導をしていただきました。毎週、論文の進捗状況を報告し貴重なコメントを頂きました。材料はある程度集まっているにもかかわらず纏めることができない私のために3ヵ月後の論文完成お祝い

会を設定して下さったので、必死に論文を書いたのも今は懐かしい思い出です。いつもアドバイジーの卒業や就職先が決まるとお祝い会をして下さいました。美味しいお酒とお料理と博識の先生のお話で、話題は文化論、憲法9条、政治、文学、もちろん心理学の方向性など多岐に渡り、本当に楽しい時間でした。アドバイジーや研究を手伝った卒業生は、就職や進学のために先生から推薦状を書いていただいたことがあると思います。レポート用紙3～4枚に縦書き自筆でびっしりと書いて下さった暖かい推薦状に感激した話は何度も聞きました。

先生のご退職後はお世話になった私共アドバイジーが中心となり先生を囲む会を企画しました。初回はICUの桜がお好きだった先生のためにICU桜を観て吉祥寺でお食事、そして最後は2013年6月末藤沢のご自宅近くの居酒屋での食事会でした。約15年間、学会先や東京近郊で年に1、2回メンバーの誰かが声をかけて集まりました。

2009年から2011年まで私が担当していた「教育心理学」の授業内で、教育研究所の公開フォーラムとして、藤永先生に「知能と学力」について講演をしていただきました。偏差値万能学力観とは何か、学力概念を考察する視点として、学力の基底層をなす「知能」の成立と変遷の経過、テスト化された際の性能、理論的根拠と近年における革新の動きを、ゆったりとした口調で説得力のある講演をして下さいました。履修生100名前後と院生や卒業生が集まり、大変好評の公開フォーラムでした。

ある時、学会活動をしっかりしているかと先生から問われたので、「価値観のデータが集まらず苦勞をしています。」と答えました。「いろいろな研究はあるけれど、実は同じ尺度で1960年代から継時的にICUで行われている価値観調査は貴重だよ。それを大学行政に携わる人が分かっているのが残念だ。」とおっしゃっていました。後継者が現れるまで価値観研究プロジェクトを続けなければと思っているのですが。

先生は85歳を過ぎて、心理学プロパーが最も信頼する2013年出版の心理学事典の監修をされ

てお忙しそうでした。そして、入院直前まで書き続けた最後のご著作「藤永保の『子育て・子育て』考－子育て困難な時代への警鐘」は、深く鋭い文化論の視点から現在の幼児教育を憂える藤永先生の遺言だと思い、教育現場で少しでも伝えていければと思っています。

藤永先生に出会えて、ご指導していただいたことを本当に感謝しています。ありがとうございます。

(大井直子)